

豹軒の渡台

森岡ゆかり

二〇〇四年三月、鈴木豹軒（一八七八—一九六三）の故郷新潟県吉田町をめざした。吉田町に近い弥彦温泉に泊まった翌朝、目が覚めると外は雪が降っていた。大阪から新潟へ車で移動した前日は新潟の県境を越えても二〇度を超す陽気だったというのに、あたりはうつつすらと雪化粧をほどこしていた。

吉田町史料館を訪れた日は、ちょうど豹軒の漢詩鑑賞会の定例会が開催されていた。場所は史料館横の木造家屋で、かつて漢学塾長善館の建物として使われていたものだ。十人あまりの参加者は高齢の男性が多かったが、女性や若い人も混じっていた。ほとんどの人が漢和辞典持参だったので驚いた。かもしに鈴木豹軒の色紙とともに彼の学生だった吉

川幸次郎、小川環樹の色紙が仲良く並び、床の間に鈴木豹軒揮毫の「長善館碑」の拓本が掛けられ、漢詩を讀むのにふさわしい雰囲気をかもし出していた。用紙の隅に「暫定」と押印されたレジメが配布された。まだ参加者の意見の一致を見ていないという意味だ。詩の説明が終わると自然と質疑応答がはじまった。大学の演習授業のようだった。豹軒のふるさとに彼の詩を讀み解く人々がいることに、心が揺さぶられる思いがした。

定例会終了後、史料館館長吉田勝氏に案内していただき、豹軒の墓に詣でることにした。いつのまにか降り止んだ春の雪は急速に融けはじめていた。鈴木家の墓所の一隅に立つ墓石に刻まれていたのは「鈴木家之

墓」。案内されなければ豹軒の葬られたところと気づかなかったかもしれない。墓前で、先生の詩境に近づかせてくださいと手を合わせた。

三年前、台北で鈴木豹軒研究を始めた。学問的に未熟なわたしにとっては無謀な挑戦といえるのだけれど、それぞれ約二年の中国・台湾体験を持つ豹軒に惹かれたのは、わたし自身が中国・台湾両方に居住する機会を得たためだ。台北在住時代のわたしは、自分が住んでいた陽明山の大学宿舍から紗帽山を見るたびに、豹軒の紗帽山を詠じた詩を思い出していた。彼の寂しさや、台湾の風物への憧れを自らの思いに重ねることができたことで、どんなに心癒されたことか。

豹軒は、鈴木虎雄と記す方が世間の理解を得やすいかもしれない。豹軒こと鈴木虎雄は、京都大学で数多くの中国文学研究者を育成し、多大な業績を残した漢学者だからだ。



図版1 鈴木家の墓所。右端に立つのが豹軒の眠る
「鈴木家之墓」(筆者撮影、2004年3月18日)

けれども、近代日本漢詩人のひとりとしても後世に伝えられるべき存在にはちがいない。学生のひとりだった青木正児は「先生の業績の寧ろ本領とも為すべき漢詩作品」(『名譽町民豹軒鈴木虎雄先生』、吉田町教育委員会編集・発行)と言っている。確かに、日夏耿之介『明治大正詩史』や猪口篤志『日本漢文学史』などの概説書に紹介されており、神田喜一郎編『明治漢詩文集』は九首の詩を

収録している。また、豹軒の漢詩は「本領」と称されるにふさわしく大量に残っている。『豹軒詩鈔』に千五百余首、『豹軒退休集』に約七千首が収められ、さらにそれ以降も創作は継続されている(未刊)。したがって総数では一万首をはるかに超えることになる。この詩数は中国宋代の多作で有名な陸游をしのぐ。

豹軒の事績と生涯については、吉川幸次郎・小川環樹等「先学を語る——鈴木虎雄先生」(『東方学』五十二輯、一九六二年、後に東方学会編『東方学回想Ⅱ——先学を語る(二)』、刀水書房再録)や、興膳宏「鈴木虎雄——(江上波夫編『東洋学の系譜』大修館書店所収)などがあるが、京都大学で教鞭を執る以前について語られることは少ない。彼が台湾で二年を過ごしたこともよく知られているが、わずかに言及されるにとどまる。わたし自身まだ研究の途上にある。

豹軒が台湾に渡ったのは一九〇三

年(明治三六)のことだ。当時、彼の姓は「大橋」と言った。豹軒の祖父鈴木文台は長善館を新潟県の粟生津(現在の吉田町)に開き、父惕軒がそれを継承した。惕軒は金銭的余裕がなかったために、五男の豹軒を東京に遊学させるために学費援助を周囲に頼まねばならなかった。ちょうどその折、大橋小一郎から豹軒を養子にしたいとの申し出があり、一八八九年(明治二二)、惕軒は息子の将来を考え、豹軒を養子として大橋家に託すこととした(鈴木虎雄『鈴木惕軒先生年譜』寛文堂に詳しい)。

豹軒大橋虎雄は東京の第一高等学校を経て東京帝国大学漢文科を卒業し、陸羯南(一八五七—一九〇七)の経営・主宰する日本新聞社に入社する。一九〇一年(明治三十四)五月から新聞『日本』の記者として活躍したが、『台湾日日新報』が漢文部主任粕山衣洲(二八五五—一九一九)の後任をもとめていたのに応じ、台湾行きを決意する(このあたりの事

情は島田謹二「靄山衣洲の「南菜園雑詠」『日本における外国文学』下巻、朝日新聞社に言及がある。

東京から台湾までの彼の足跡は、『台湾日日新報』の「渡台の記」(一)〜(五)(一九〇三年四月五日、四月七日、四月九日、四月二十一日、四月二十二日)に記されている。ただし豹軒本人ではなく、「再来雁」という筆名の台湾日日新報社の記者の執筆による。この紀行文はまるで取調べ調書のように、旅の様子を詳しく描いている。

(三月)廿三日新橋を立出しかど、未だ片付かざる用事ありければ、知友には此日に出発する由を告げて予は途中より引返へし、豹軒のみ一日先きに出発しつ、君は名古屋に其の友人を訪ふ約束ありて、予を同地に待つこと、なせり、……廿五日午前二時幾分といふに名古屋に着く、兼ねて打合せたること、て、豹軒約束の時間に来り

て乗車す、同市明倫中学校教頭なる千葉文学士など豹軒を送りて停車場に在り、同文学士は予と同郷の人、而して互に名を相識るのみ、未だ面識なかりしが、豹軒の紹介に依り初めて語を接せるも一奇といふべし、……(『台湾日日新報』「渡台の記」(二))

豹軒は「再来雁」と名古屋で合流し、以後、二人は一緒に台湾まで旅をする。船に乗る前に二人は大阪に向っている。「渡台の記」は次のように記している。

午後九時三十分神戸に着、先づ商船会社を訪ふて乗船の事など聞合せ、此日は大阪に引返へして博覧会を見物したる後、明日午後四時門司にて乗船することに決し、豹軒と共に大阪に赴く。(前掲「渡台の記」(二))

一九〇三年大阪で第五回内国勸業

万国博覧会が開催されていた。かれらの大阪行きの目的は、博覧会見学、なかでも台湾館を參觀することにあった。博覧会の会場は大阪市天王寺区(現在の天王寺公園一带)にあり、会期は三月一日から七月三十一日までだった。豹軒たちは開催直後に訪れたことになる。豹軒は「台湾館」を詩題に七言絶句を創作している。

茶白山頭噴水浜、
雉簷鳳閣瓦鱗鱗。
都人皆過台湾館、
今日始知南海珍。

茶白山頭 噴水の浜、
雉簷鳳閣 瓦鱗鱗たり。
都の人は皆な過る 台湾館、
今日始めて知る 南海の珍。

起句は台湾館の立地を詠じている。茶白山は人工的に作られた小さな山だ。一六一四年(慶長一九)大阪冬の陣では徳川家康の本陣に、翌

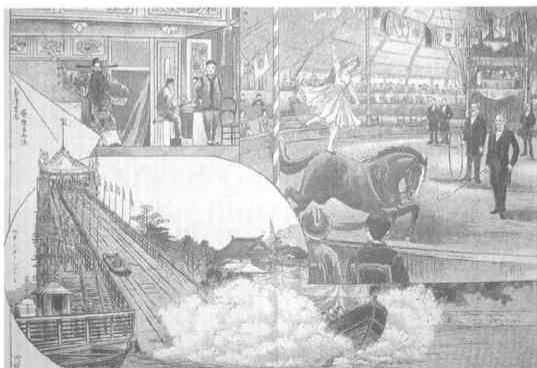
年の大坂夏の陣では真田幸村の本陣となったことで知られている。この茶白山一帯も博覧会会場となっており、台湾館はすぐ近くにあった。茶白山前の池には「ウォーターシュート」が設置されていた。「ウォーターシュート」は「乗客を小艇に載せて、高さ四呎の台上より、長さ三百十四尺の斜面の軌道を走らせて、池中に墜せば艇は乱波飛沫の間に没して、暫時、その形を失ふ」（『風俗画報・臨時増刊——第五回内国勸業博覧会図会』東陽堂、以下『風俗画報』と称する）というもので、現在の遊園地ではよく見かける遊戯施設だ。一九〇三年には非常に珍しく、多くの客を集めた。吉見俊哉「博覧会の政治学」や、松田京子「帝国の視線」等に詳しい。豹軒にも印象深かっただろう。

承句はパビリオン台湾館の外観を詠じている。台湾館の主たる建物「篤敬堂」はそもそも台南莊雅橋街にあった鄭氏の宗祠だったものだ。一

八九四年・一八九五年日本軍北白川能久親王の幕宮として使われ、後に「戦勝の記念」として保存していたのを博覧会のために移築された（稲垣 其外「台湾館」(一)『台湾日日新報』一九〇三年六月七日参照）。

転句はあながち誇張とはいえないだろう。豹軒に同行した「再来雁」の「渡台の記」にも「蓋し博覧会場内に於て最も人氣に投じ、且つ新奇の情を以て迎へらるるものは、台湾館を以て第一とすべきか」と記されている。「其建築の奇なる点と、陳列せる物産の珍異なる所」が見物人を集めたせいだが、豹軒は結句で「南海珍」と詠じている。パビリオン台湾館で豹軒が見た「南海珍」は具体的にはどういうものだったのか。前掲『風俗画報』などの当時の資料や前掲『帝国の視線』等現在の研究成果から再現すると、次のようにまとめられるだろう。

「篤敬堂」の中に、「土俗」即ち台湾の漢族の風俗・習慣についての展



図版2 『風俗画報・臨時増刊—第五回内国勸業博覧会図会』（東陽堂、1903年）の挿絵。左下が「ウォーターシュート」（大阪府立中之島図書館所蔵）

示がなされた。等身大の人形十体に、閩族男女の盛装、新郎新婦の服、道士服、僧侶服、閩族男女の喪服、労力の服、粵族婦人の服を着せ、さらに室内に寝台を置き、居住空間を再現していた。また、「篤敬堂」隣の「参考室」では「蕃俗」の展示がなされ、台湾の原住民を八つに分けて衣服、装飾具、飲食器具、武器、楽器、住居写真を陳列していた。加えて、庭園もひとときわ目立つものだった。台湾風の建物に台湾の動植物、例えば椰子、玉蘭、龍眼樹、実芭蕉、檳榔樹、榕樹、荔枝樹、水牛、山羊、羌仔、澎湖島の鳩などを配していた。雪国生まれの豹軒には初めて目にするものばかりだったにちがいない。

竹筵楠榻倚輕紗、
侍女鮮娟雁步斜。

酒国雞鳴狗盜侶、
風流爭喫烏龍茶。

竹筵 楠榻 輕紗倚る、
侍女鮮娟として 雁步斜めなり。

酒国の雞鳴狗盜の侶、
風流 争いて喫す 烏龍茶。

『風俗画報』は、「喫茶店は台北なる茶商公会の計画せし所にて總督府の建設貸与に係り、阿買（十五年）、阿玉（十三年）、宝仙（十一年）の三女兒『お茶一つあ上んなさい』と内地語を用ゐて烏龍茶を持ち来るさまあいらし」とその様子を伝えている。料理店もあり、「台湾風の食膳を供し、玉愛、宝琴の二女」（前掲『風俗画報』）が接待していた。喫茶店も料理店も繁盛したが、その原因のひとつは彼女たちの纏足だった（前掲『帝国の視点』、須藤瑞代「消えていく李宝玉」『中国女性史研究』第十二号、二〇〇三年などに詳しい）。

豹軒の詩では、「輕紗」「鮮娟」を

使って女性たちの美しさを、「雁歩斜」を用いて、纏足の女性の歩き方を形容している。起・承句が給仕の女性たちについて詠じられているのは、喫茶店での彼女たちが強く心に残ったせいだろう。転句・結句は喫茶店を訪れる客に視点が移っている。孟嘗君の故事を引き、酒好きなき鶏鳴狗盜のような海千山千の輩たちでさえも風流を競い合うように烏龍茶を飲んでいと詠じている。今でも百年前には珍しかったのだ。

一九〇三年四月十二日付の『台湾日日新報』の漢詩欄「詩春秋」は、前述した「台湾館」、「烏龍茶」詩とともに豹軒の「両親傷」という七言絶句を載せている。台湾館の纏足の女性たちの姿に触発されて作った詩だろう。

台北固聞文化場、
每思兒訓兩親傷。
功容言德平生教、



図版3 台湾館の外観(鳴戸源之助「第五回内国勸業博覧会記念写真帖」玉鳴館、1903年、所載写真「台湾館」(部分))(大阪府立中之島図書館所蔵)

猶欠中流女学堂。

台北 固より聞く 文化の場、
毎に児を思いて訓ず 両親の傷
つけらるるを。

功容言徳は平生の教え、

猶お欠く 中流の女学堂。

え方に反するため、「文人に好まれた
にもかかわらず、宋の車若水ら儒者
からの批判も早くからあつた」と指
摘している。儒家の家系で八歳から
長善館で漢学を学んだ豹軒も、儒家
の教えと矛盾するという観点から纏
足を捉えていたと考えられる。

『孝経』に「身体髮膚これを父母に
受け、敢えて毀傷せずは孝の始めな
り」の一節があり、「親を傷つく」の
例として『礼記』に「其の身を敬す
る能わざるは是れ其の親を傷つくる
なり」の句が見られる。これらをふ
まえて「両親傷」と詠じたのだろう。

転句は、女性たちが「婦功、婦容、
婦言、婦徳」の女性として守るべき四
つの規範を日常の教えとしていろと
詠じている。豹軒の考える台北の「文
化」とは、儒家の教えが浸透した伝
統的な漢文化にほかならなかつた。

承句は、子どもたちへの愛情から、
親にもらつた身体を傷つけることは
親が傷つけられることにつながり、
親不孝にあたると常々教えていると
いう意味に解せられる。ただしその
一方で、女性たちは身体を傷つける
ような纏足を施していると暗に言ひ
たいのではないか。坂元ひろ子は『中
国民族主義の神話』において、纏足
は『孝経』の「身体髮膚……」の考

結句で「台湾には中流階級の女子
のための教育の場がないのか」と慨
嘆するのは、台湾女性が「働く」形
で「展示」され、好奇の目にさらさ
れている事実を感じるものがあつた
にちがいない。近代に入ると纏足は
野蛮の象徴と見なされるようにな
り、中国でも台湾でも「天足運動」
が発生することはよく知られてい
る。台湾館での纏足の女性の「展示」
は、知識人の思想の転換期において

大きな影響を与える事件となった。

一八九七年に梁啓超（一八七三—一九二九）が『愛法通議』において「纏足が一日にして変わらなければ女学堂も一日にして立たない」（『飲冰室文集』第三冊、台湾中華書局第二版）と述べて女学堂の建設の重要性を訴えるように、新しいタイプの女子教育の必要性がしだいに叫ばれるようになった。このような同時代の動向と照らし合わせると、豹軒の若い感受性がよりいっそう身近なものとして迫ってくるのではないか。

ちなみに、若いころの豹軒の漢詩を収録した『豹軒詩抄』には「台湾日日新報」で発表された「台湾館」、「烏龍茶」、「両親傷」は収められていない。『豹軒詩抄』は三千首を超える漢詩の中から選録されたものなので、残念なことに三首は選に漏れてしまったのだ。創作力が向上し、台湾で生活体験を経た後の豹軒にとつて、これらの三首ははなはだ未熟なものとして映ったのかもしれない。

「渡台の記」の執筆者「再來雁」は、「学あり識あること豹軒の如きは以つてして、猶且つ予想する所と頗る異なるを言ひ、此の如き産物は台湾より出づるかなと問答して屢屢予と共に滑稽の材料を供給せり」（前掲「渡台の記」（二）と、豹軒の台湾館に対する感想を書き加えている。豹軒は何を見ても珍しく、同行者に自らの驚きを表さずにはいられなかつたのだ。好奇心いっぱい若い漢詩人の姿が、『台湾日日新報』の記事と漢詩から浮かび上がってくる。こうして大阪で台湾についての予備知識を身につけた後、ようやく台湾へと旅発つ。

台湾館參觀後、午後六時十分に梅田停車場に引き返して山陽列車に乗り込み、二十六日午前十一時に馬関（現在の下関）に到着。そして同じ二十六日午後三時に二人は台中丸の船客となった。『豹軒詩抄』と『葯房主人歌草』をあわせ見ると、船旅の間も豹軒が漢詩と短歌の創作を怠らな

かったことがわかる（豹軒が船中で詠んだ短歌十一首は「渡台の記」にも引用されている）。

彼らの乗った船は二十八日午前九時台湾の基隆港にたどり着き、豹軒は台湾に足を踏み入れた。日露戦争が勃発し、ロシアのバルチック艦隊が台湾海峡を通過し旅順に向つたのは、豹軒が台北で記者をしていた時のことであり、「大橋」から「鈴木」への復姓を果たしたのも台北でのことだった。豹軒の台湾生活はいよいよこれから始まるのだが、本稿はここまでとする。

〔付記〕本稿執筆にあたり、ご協力いただいた吉田町史料館および図版の掲載を許可してくださった大阪府立中之島図書館に謝意を申し上げます。二〇〇二年度短期訪問学者として豹軒と台湾についての研究の機会を与え便宜をはかってくださった台湾中央研究院中国文哲研究所に深く感謝したい。なお、著書・論文引用に際して執筆者の敬称を省いたことを特記しておく。